

自分探しの旅



介護認知症の着段普

「自分探しの旅」と聞いて思い浮かぶのは、若者の旅かもしれない。私は今年六月、もうすぐ九十歳になる女性の「自分探し」に同行しました。

女性の名は田中さん（仮名）。中重度の認知症があります。ご主人が亡くなってからは、マンションで一人暮らし。お子さんはいません。寂しいのか、毎日のように「田舎に帰りたいたい。親類に会いたい」と言います。そこで担当の私、もう一人の介護士とともに、一泊二日で故郷の福島県へ帰省しました。

実は田中さんは二月末、持病で狭くなった気道にたんが絡み、窒息しかけたため緊急入院しました。退院後はユアハウスに連泊。そのうち「家に帰るのは嫌」「福島施設に入りたいたい」と言いだしたため、帰省で本当の意思を確認したいという思いもありました。

田中さんと出会って約三年半。私は担当として、誰よりも田中さんを知っている自信がありました。でもこの旅行を通して、何も知らなかったことに気付かされたのです。

故郷で確かめた本心

福島では、弟さんや姪御さんに会えました。姪御さんは、年の離れた妹さんの娘。七人きょうだいのうち女性は一人だけだったため、田中さんは妹さんを娘のようにかわいがり、亡くなったときは、とてもつらそうだったそうです。

姪御さんを見た途端、田中さんは妹さんの名を叫びました。私たちが「姪御さんですよ」と説明しても、時々忘れて、妹さんと認識してしまいました。ぎゅっと手を握り、ずっと離そうとしません。こんなに大切な人がいるなんて、知りませんでした。

そして、ご両親のお墓参りへ。緑深く、空気の澄み渡るすてきな場所でした。何度も深く頭を下げ「しばらく来られなくて申し訳なかった。もっと早く来たかったんだけど」と謝る田中さん。「将来は（自分も）このお墓に入るんだよ」と教えてくれました。

最後は猪苗代湖へ行ききました。よくデートに来たそ

帰省に同行 より深い理解の助けに

うで「私はモテたんだよ」とも。すっかり満足した田中さんは「そろそろ家に帰りたいたい。ユアハウスに行こうよ」。福島は大好きな場所。でも帰る場所は、東京にあるご自宅だということが分かりました。

このように介護士と一緒に旅をするのは、異例のことです。今回は、姪御さんたちの全面協力を得て実現しました。準備にかけた時間は一カ月以上。荷物は海外旅行用のスーツケースいっぱいになり、旅行中も車椅子の使える旅館に泊まったのは良かったけれど、新幹線の利用は大変でした。持病があるため、体調管理にも神経を使いました。

それでも、田中さんが最期まで、そして「その先」をどのように「生きたい」のか、知ることができて良かったです。「良い人生だったな」と思ってもらえるよう、今、頑張ろうと気を引き締めました。

旅から約三カ月がたちました。田中さんと福島の話をする時、なぜか「猪苗代湖へ行つたよね」としか返ってきません。人は、やはり一番自分が輝いていた青春時代を思い出したくなるのでしょうか。一緒に探した「自分」を大切に、ケアをしている毎日です。

（森近恵梨子 介護士・二十五歳）

◇ 小規模多機能型居宅介護事業所「ユアハウス弥生」（東京都文京区）スタッフが、介護の実践を報告する。次回は十月二十七日掲載



田中さん（右）が来たがっていた温泉旅館で筆者と6月、福島県で